

# 異国から舞い降りた麒麟 — グラバーと明治産業革命 —

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

長崎港を見下ろす丘の上にトーマス・ブレイク・グラバー（1838-1911）が住んでいた邸宅が建っている。現存する最古の木造洋館と周辺の歴史的建築物で構成される一帯はグラバー園として有数の観光名所となっている。

幕末のグラバー邸には坂本龍馬を筆頭に維新の立役者が出入りし、政商グラバーの支援で薩長同盟による倒幕の道を拓いた。明治新政府樹立後は三菱の懐刀として急激に開花する産業革命の牽引役を果たす。

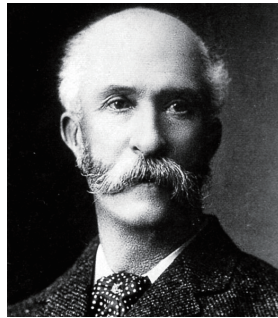
華々しい歴史の表舞台の背後には常に西欧文明を一身に体現した異端の商人の影が付き添っていた。グラバーのドラマティックな生涯を追うことで疾風怒濤の時代の全貌が明らかになってくる。

## 幕府の最大の謀反人

グラバーはスコットランドの港湾都市アバディーンで8人兄弟姉妹の5男として生まれた。父親は沿岸警備隊の1等航海士だった。

中高一貫校のギムナジウム卒業後、阿片戦争で揺れる中国の上海に渡ってアジア最大の貿易商社ジャーディン・マセソン商会に入社する。1859年、21歳で開港まもない長崎に移り、2年後に同商会の長崎代理人としてグラバー商会を設立した。

日本茶の輸出貿易で成功したグラバーは幕末の動乱のなかで反幕府勢力を支援するようになる。



トーマス・ブレイク・グラバー

とりわけ坂本龍馬が創設した日本初の株式会社といわれる亀山社中と手を組み、薩長などの雄藩と武器、弾薬、艦船などの取引を活発に繰り広げた。

1863年、外国人居留地に広大な敷地をもつグラバー邸が完成。屋根裏に隠し部屋をつくって密談に利用し、長崎奉行所に追われて逃げ込んできた長州の桂小五郎ら<sup>かくま</sup>を匿した。

薩摩の五代友厚や長州の伊藤博文など若き志士たちの海外渡航も率先して手助けした。薩英戦争で敵対した双方を和解させるためにイギリス公使パークスの薩摩訪問を画策し、みずからも随行して藩主・島津久光との会談を実現させた。これで倒幕の気運に拍車がかかり、薩長が同盟する重要なきっかけになったという。

死の商人と呼ばれながらもグラバーは私益のみを目的として倒幕勢力に加担したわけではない。のちに薩長の壁を壊したのが自分の最大の手柄であり、幕府に対する「最大の謀反人は私だろう」と誇らしげに語っている。

## 西欧文明の伝播者として

長崎を代表する貿易商となったグラバーは西欧

近代文明の伝播者としても歴史的な痕跡を遺した。1865年、上海で蒸気機関車アイアン・デューク号（鉄の公爵）を手に入れ、大浦海岸に線路を敷設して公開運転を行う。日本で最初の鉄道といわれる新橋—横浜間が開通する7年前だ。

1867年には薩摩藩と協力して現在の小菅町の入江に小菅修船所を建設。通称ソロバン・ドックは近代造船の発祥の地として後世に名を残す。

明治元年となる1868年から佐賀藩と日本初の合弁事業として炭鉱開発に着手する。長崎の南西海上に位置する高島炭鉱にイギリスの最新設備を導入し、熟練した技師も呼び寄せて近代的な国産石炭採掘事業の礎を築いた。

私生活では五代友厚の紹介で大阪の造船業者の娘ツルを娶った。結婚後も着物姿を通したツルはイタリアの作曲家ブッチーニのオペラ「マダム・バタフライ」（蝶々夫人）のモデルとも伝えられている。

公私ともに順風満帆に見えたグラバーの生活にも思わぬ落とし穴が待ちうけていた。幕府と官軍による内戦の長期化を予想していたものの、勝敗は鳥羽伏見の戦いで一気に決し、大量に抱え込んでいた物資が売れ残った。軍備で財政難に陥っていた西南雄藩からの返済も滞り、ついにグラバー商会は1870年、資金繰りに窮して倒産する。

だが百戦錬磨のグラバーは高島炭鉱の実質的経営者として生き残り、明治維新後の後半生を岩崎弥太郎が率いる三菱と共に歩んでいく。

## ビールに込めた友情

土佐藩は1870年、殖産興業を目的とする開成館の長崎出張所として土佐商会を設立し、3年前に赴任していた岩城弥太郎に命じて海運業を興す。このとき全面的に手助けしたのがグラバーだった。

海運業に成功して三菱を創業した岩崎は1881年、高島炭鉱を買収してグラバーを所長に任命する。岩崎に次ぐ最高幹部である管事の川田小一郎が「高島の石炭を海外に輸出する采配はグラバー殿にお願いしたい」と要請したところ、グラバーは「川田殿、岩崎殿にお伝えください。必ずやご満足いただける結果を出しましょう」と豪語した。

期待に応じて海外取引を軌道に乗せたグラバーは三菱本社の渉外関係顧問として迎えられ、東京に移り住んだ。国際化路線のアドバイザーとしてグラバーへの信頼は厚く、のちに終身顧問となって管事を上回る破格の給与で厚遇された。

1885年、胃がんで急逝した岩崎の遺志を継いでグラバーは国産ビールの醸造事業に情熱を注ぐ。岩崎の弟の弥之助や後藤象次郎や渋沢栄一などから出資を仰いでジャパン・ブルワリー・カンパニーを設立し、3年後には国産初の麒麟ビールを明治屋から売り出した。

1899年、愛妻ツルが病没し、慢性腎臓炎を患ったグラバーも12年後に麻布の自宅で永眠する。遺骨は長崎市坂本町の国際墓地にツルと共に埋葬された。イギリス艦船は半旗を掲げ、長崎市民も喪に服したという。

娘のハナは長崎で働くイギリス商人と結婚し、夫と共に海外に出て1938年に他界。息子のトムは倉場富三郎と名乗り、長崎で漁業会社を設立して魚類図鑑の編纂やトロール漁法の導入に努めるなど漁業の近代化に貢献した。しかし第2次世界大戦中に外国系日本人として圧迫されるなど極度の不安に苛まれ、1945年の終戦直後にみずから命を断つ。

晩年のグラバーが遺したのものとして一種の伝説となっているのが麒麟ビールのロゴマークだ。麒麟は中国の想像上の神聖な動物で1000年生き、心がけの良い者にしか見えないといわれている。性質は穏やかでやさしく殺生を嫌い、アフリカにいる首の長いキリンは聖獣の麒麟に模して名づけられた。

福岡の太宰府天満宮にある麒麟像に魅せられ、何度も譲ってくれと打診していたグラバーが麒麟の雄姿をロゴマークにしようと考えたのは不思議ではない。顔は龍、胴体は馬を彷彿させ、全身が黄色の毛で覆われた麒麟像は坂本龍馬の象徴とも伝えられている。激動の時代を共に生き、志半ばで斃れた盟友の姿をグラバーは聖なる麒麟と重ねあわせていたのかもしれない。

1907年、ジャパン・ブルワリー・カンパニーは三菱に買収された。麒麟のデザインには創業者のグラバーを讃えて彼のトレードマークだった口髭が付け加えられた。